

弟がきた

松原由美子

森シホカ・絵

夏休みの朝。駅前のビルに、お母さんと一緒に私の水着を買いにでかけたとき、いきなり建物がぐらりと揺れた。地震だ。このごろちよくちよく地震があつて、めずらしいことじゃないのに、ビルが揺れるとおそろしかった。お母さんがすぐ携帯で調べてくれて、震度四だつてわかつた。「高いビルだから、すぐ揺れたみたい感じたのね。あわてちゃ、だめね」

お母さんはわたしを抱き寄せて、笑つてみせた。でもそのあと、おなかがつっぱる、つて言つてその場で座り込んでしまった。お母さんは妊婦さんだ。わたしはお母さんの抱えていた荷物を全部持った。先に立つて、混んだ店の人をかき分けて、やっとソファにたどりついた。「ごめん。買い物、またこんどにしよう」

そう言つてお母さんはだまつた。汗をたくさんかいて、しんどそうだ。私たちは買い物を取りやめて、家にまっすぐ帰つた。歩く間も、バスの中でも「平気よ」と言うお母さんは、ちつとも平気そうじゃなかつた。

部屋で長いことじつとして、お母さんは肩で息をしていた。それからクッションにもたれて苦しそうに目を閉じた。「心配ないから」つて言つて、ずっと動かなかつた。「そのたなの上のシオルダー、取つてくれる？」

立ち上がるのもきついのか？ 思わずお母さんの顔を見たら、お母さんはごそごそと手探りして、バッグから携帯を取り出した。最初に病院に連絡して、それからお父さんの携帯にも電話をかけた。

